

「少年の日の思い出」 読んだ読んだ 第四場面

「僕」は、エーミールのクジャクヤママユを見たいという気持ちを抑えられなかった。そして、クジャクヤママユを間近で見た「僕」は、あまりのすごさに興奮した。

井上竣介さん

「僕」はエーミールがクジャクヤママユをさなぎからかえしたことを知り、人の家に勝手に入り、部屋まであさり、そしてちようを捕ったときと同じぐらい興奮していた。

木村啄望さん

「僕」はちようの収集に熱情があった。その証拠に、麻は庭の中、昼は乾いた荒野、夜は森の外れ、とだんだんちようを探す範囲が広がっている。だから、「僕」はエーミールの捕まえたちように興奮した。

真田夏葵さん

「僕」は、エーミールのことが嫌いで嫌いでしかたがなかったけれど、そのエーミールがとったクジャクヤママユが「僕」の心に衝撃を与えて、驚きとかうらやましきから、興奮した。

小河諒花さん

「僕」は、今までずっとほしがっていたクジャクヤママユをエーミールがさなぎからかえしたと聞いて、とても興奮して、ブレーキがきかなくなつてエーミールの部屋に行ってしまったりして、興奮していることが分かった。

山田純平さん

「僕」は、挿絵でしか見たことのなかったあこがれのクジャクヤママユを、あのエーミールがもっていると知り、見たいという気持ちしなくなつてしまった。エーミールの部屋の中に入り、クジャクヤママユを見て、獲物を捕らえたときと同じように興奮した。

北川真理さん

「僕」は、クジャクヤママユをとったエーミールをうらやましく思い、見たいという欲望を抑えられず、エーミールの部屋に入った。有名な斑点は見られなかったが、クジャクヤママユを生で見ることでちようを捕っている時を思い出し、興奮した。

奥村壮太さん

「僕」は、クジャクヤママユに対して特別な気持ちがあった。「あのエーミールが」の「あの」と書き、悔しい気持ちが表れている。エーミールの家へ上がり込むときも、ブレーキがきかず、見たいという気持ちが先走ってしまった。間近で見たときは、ちようを捕らえるときのように、興奮した。

長屋未来さん

「僕」は、まだだれも捕まえていないクジャクヤママユを人より先に見、エーミールの家の中に入って、それを見つかるまでの時間は、とても楽しかったと思う。この気持ちよりさらに大きいのは、初めてクジャクヤママユを見て、細かなところまで観察できたことで、興奮した。

石原由大さん

「僕」は、あれから二年がたつても、ちように対する熱情はまだ大きくあつて、エーミールの大切なクジャクヤママユが見たい!!という気持ちがとても大きくあつて、勝手に部屋のドアのハンドルを回したりして、人の家なのに、勝手なことばかりしている。でも、なぜこんなに勝手なことまでしてクジャクヤママユをみたいかという、エーミールが不思議なちようをもっている!!とて聞くと見たくしかなかったがなく、興奮したのだ。

浅野菜月さん

「僕」は、あのクジャクヤママユをエーミールがもっていると聞いて、エーミールの家へ行った。しかし、家にエーミールはいなかったのに、家に入った。それだけで普通に考えれば、いけないことである。その後も勝手にいるんなこととしている。こういったことによつて「僕」がいかにクジャクヤママユを見たいかということが分かる。つまり、クジャクヤママユがエーミールの家にあるということに対して普通でない異常な興奮をしたのである。

伊藤雄一朗さん

「僕」は、二年たつても、ちよう集めの熱情はまだあつた。その時、嫌いなエーミールがクジャクヤママユをもっていると言うことを知り、「幾度」という言葉やエーミールの家に勝手に上ることから分かるように、とても興奮していた。そして、クジャクヤママユを見たときには、「毛の生えたく羊毛のような毛」というところから分かるように、ちようを捕るときと同じ「熱情」がこみ上げてきて、興奮した。

井上智元さん